

# 街におけるコミュニケーションと交流、街歩き雑感～大山上滝の街歩きにて

2019.01.04 to

## 1. はじめに

今年(2018)の9月に実施された大山歴史民俗研究会主催の大山上滝街の街歩きの際に思ったことがある。世の中、街・村起こしが叫ばれ、ビジネスチャンス創生といった派手な取り組みもあるなかで、街歩きによる出会い重視という素朴な視点があつてもいいのではと。特に、街の魅力を街と人の両面から必要に応じて掘り起し、街住人と街訪問者とのコミュニケーションや生活模様に着目すべきと思う。

ここでは、上述のような考え方で、街歩きに着目してその効用を検討し、併せて街観光、街見学、街づくりについて雑感を述べることにした。扱う対象は二つあり、一つが街の居住者中心の生活環境としての街づくりであり、もう一つが街の営みとしての観光である。本稿の目的の背後には、街の特質に合わせた観光について街歩きの望ましい姿を展望することにある。今後の街づくりに資すれば幸いである。

## 2. アプローチ

- (1)街歩きについては、街歩きの構成する要素を「街、営み(観光)、人」として、街や観光のそもそもを論ずる。
  - ・街歩きには、ホスト側とゲスト側とにどんな思いがあり、どんな結果を求めているかを論ずる。
  - ・街歩きの実際を展望し、効用を論ずる。
- (2)街においてホスト側とゲスト側のコミュニケーションと交じり合い(交流)を視点として論を進める。
- (3)街の個性や特性をもとに、ありうるべき街歩きの姿を展望する。

## 3. 街

### 3.1 街とは

人々が集住して日常生活を営むいわゆる生活圏を街とし定義しておく。ここで生活圏のイメージを次の二点から鮮明にしたい。

(1)日常生活圏の捉え方：昔と今の対比； 昔は日常圏が狭く設定されていた。理由は移動には徒歩が中心であったからである。ところが現代は交通の発達や生活の多様化により、生活圏が広がり(広域生活圏)、ボーダレスになっているかのようである。よって、ここに生活圏を二重設定(広域と徒歩の狭範囲の圏)とした。<sup>1)</sup>

(2)街の多様性保持：均一性か多様か； 昔からの街には、古さと新しさが混在し、また人的構成も文字通り老若男女である。これが街に多様性を漂わせ、歴史と個性を育んでいる。ところが、近年の住まい方の効率化として土地利用機能分離が新興住宅地をつくり、建物も人(気質や意識)も均質(均一)化されてきた。また営みについても観光の場合には、特定の目的遂行で営みの均質化として大規模観光という効率化が進められている。共に基本考が不十分といいたい。なお、均質化と統一感の違いについて一言。街の統一感とは、建築と住民に関する均一性とは別物であり、建物に落ち着き感や住民の気質の奥深さ感をいう。

### 3.2 今何とかしたい街

全国各地の街は総じてピンチにある。もちろん、都市が繁栄しているではないかという事実もそのとおりであるが、都市が周辺の田舎を囲い込んでいる姿はとても正常とは思えない。それはともかく、いわゆる各地の街では、人口減少が続き、高齢者が残り、このままでは街の消滅が危惧されている。こうした街がどう生き抜いていくべきか、本論の枠を超えるものの、本論でいう街歩きが地道な街の在り方を応援の一助になると思っている。そんな観点で、どこにでもある昔からの街について特徴を述べたい。

- ・空家のみが残る新陳代謝のない街：いままでは新旧が混在する街にて、古い建物が(当街にて改築を含めて)建て替えて新しくなってきたが、今では住民が都会や街郊外(街の外)に転出し、この方々が都会や街郊外に造成された新興団地に居住となる。これまた本邦全体や地方の広域生活圏の中では新陳代謝がありといえるが、(身近ないわゆる)狭い生活圏では、住民を失った空き家のみが残り、街の老化が進行しているといえる。
- ・そんな街では、空き家の再利用はまずはほとんど無理。数えるほどの古い家が再利用できたとしても、空き家問題の抜本的解決にはならない。今は空き家の取り壊しで駐車場づくりだけが目立っている。
- ・街においては通りの建物並びが歯抜け状態となっている。そのなかでも貴重な古民家や古い町屋がある。こうした現実を前提とした風土づくりや風土保全を進めることになる。

## 4. 観光

(1)観光とは　　語源は、中国古典の『易経』にある「国の光を觀る、もって王に賓たるを利し」という一節からという<sup>2)</sup>。また「光」とは「エレギー、個性、歴史」といってよいであろう。よって、観光とは「地域の個性・歴史について風物・風景とともに觀ること」としておけば十分である。

(2)観光の要素　　・観光対象は地域の個性や歴史のこと　・観光に遊びの要素も。

- ・観光を地元民との触れ合い。これの程度(交流とコミュニケーション)によって観光を二分類。  
広くやや浅くの観光(トラベル)と深く狭くの観光(ツーリズム)。前者は従来型、後者は体験型
- ・観光サービスとして観光効率化を図る。大規模観光開発もあればグリーンツーリズムもあり。

(3)街を知る

街を知るとは郷土の時空の歴史を本来は知ることといいたい。すなわち、歴史は風景・風土や地域民気質を時間的変遷や空間的広がりで捉えることであると考える。

## 5. 街観光、関わる人

### 5.1 街観光、ホストとゲスト　ツーリズムを対象として、かかわる方々の思いを述べてみる。

(1)街観光に際し、ホスト側とゲスト側にて

・ゲスト側(訪問者)がホスト側の街を観た後に、観光結果を各自の地域に戻って反映させるべし。自分の街を良くするように種々工夫を。それが出来なくても自分の家周辺や自分の家において、見学時の心意気を反映させて欲しいものである。

・自分たち(ホスト側)が自分たちの街を守ることが使命である。そのために生産活動がある。自分たちの生計、街の生計の向上、即賑わいと活性化。ひいては住民の生活向上を。

(2)ゲスト側

・なぜ観光：自分の世界を広げる。他の世界を積極的に知りたいし楽しみたい。日常の世界にリバウをつけたい。都会生活のうんざり感を一時的に解消したい。

(3)ホスト側

・観光全般を取り仕切るには、行政サードの観光協会や非行政のNPOや任意団体の活性の会とか保存会とか研究会とかがその役を担っている。

・各建物に住む人間(街衆といいたいが住民)が時には商いをすることがあっても、住まうことで街を守り育てていることを評価したい。ホスト側が商店や宿泊だけではないのである。

### 5.2 街観光、関わる専門家

街観光では、街中を歩いて散策となる。個々の建物から構成される街の全体が観光地であれば歩いて各建物と全体の雰囲気を鑑賞する。そんな街歩きにて、コミュニケーションとして専門

的な話が鑑賞に色を添える。これに関わる人すなわち専門家は住民(ホスト側)であったり、訪問者(ゲスト側)であったりする。以下に専門家の介在や役割を考えてみる。

(1)専門家の役割 専門家の役割は、訪問者や街住民と接触し、専門本来の面白さを醸し出すコミュニケーションや交流を行うことがある。専門家を介して専門話で皆さんのが知的に楽しめるようにすることが目的である。

## (2)専門家の行為

- ・街の今を対象： 街の文化性に目を向けることもさることながら、求められているのは今の我らの家や街をより良くすることにある。

- ・接触の意味： 皆さん(訪問者や街住民)にとって知的理を楽しむ土壤作りには常に(種々分野の)専門家が街のいたるところに顔を出しているといった身近さが必要である。これには、専門家の(少しお高くとまって)啓発ではなく、専門家が街に出て皆さんと同格で接触して事にあたるべきである。

- ・楽しむコミュニケーションや交流： 皆さんと専門家とが奏でるコミュニケーションや交流は街に根付いた文化的活力そのものである。そんな活力が街に溢れるようにしたいものである。

## 6. 街歩き、ブラ歩きの実際

### (1)分類

- ・ブラ歩き：ブラタモリ(NHKの待歩き観光の番組)の通り。肩の凝らない、楽しみモード。

ブラ歩き→ 日常の違う面に発見と楽しみ。歩くことで環境体験体感、コミュニケーション醸成

- ・地元民と共に歩き：ぶらりの歩き。地元民と共に歩く。

大山流の「ブラ歩き」のトーカとウォークで、心意気・環境・生活・ゆとりなどが感じられる。

### (2)実際

- ・地元の方々や専門家を交えての街歩き：

個人又は少人数の方が観光地に出かけ、その道(地域産業、郷土史、自然)の専門家や現地の主の方々とともに街を歩き風情を堪能する。それを面白くさせたのがブラタモリといえる。

- ・観光が歩くを付けた街歩き：

が歩くを頼んでの街観光もある。ブラタモリとの違いは、が歩くが地元の方もしくは地元ファンの方であり(学術ではなく雑学的な)専門家でもある。

- ・街外のブラ歩き： 訪問者がわりあい自発的に行動

- ・フットパスという街外で歩くコースを決めて、そのコース上にいる観光客と地元民とがコミュニケーションで交流とする。これは、訪問者が勝手に地元の生活圏に入り込ませないようにしておもてなしをする場所を決め、住民が野良仕事など仕事に集中できるようにしたものである。

- ・訪問者グループのなかに地元民や専門家がすべて含まる場合もある。コミュニケーションの幅をひろげると、訪問者も街の住民意識を持つことが出来るようになる。何回も訪問すれば、もうにわか住民として街が楽しめる。

(3)ブラ歩きの効用： 歩くことには、コミュニケーションのチャンスが増え、時間が取れるメリットあり。

歩くコース及び周辺をよく観察できる。立ち止まって時間をかけることが出来る。歩くことで印象が深まる。頭脳もさわやかに働く。

## 7. 街歩きの付加事象

### 7.1 街歩き楽しませる工夫

- ・歩きを楽しませる仕掛け：アート、祭り、語り、展示館、

- ・時空に身をゆだねる：居場所、コミュニティ広場、古民家、古い町屋、棧敷席、公園

サウ、喫茶、民泊民家、旅館、

- ・文化・自然： 野外にて：石仏文化、建築雰囲気、風景等 風流：お茶、散歩中継点、等

## 7.2 街歩きの物語要素、富山の場合のいくつか

- ・山村の古民家の利活用；動態保存として日常的な活用。 五箇山、利賀、大岩、等
- ・古い町家で文化継承；保存は活用あってのもの。 八尾、井波、吉久、滑川等
- ・立山信仰や自然を基軸；富山におけるいくつかの街。 大山、立山、上市、等

## 8. 實例 成功している例として滑川を、これから例として大山の場合について述べる。

**8.1 滑川宿街並み回廊** 滑川宿（滑川市瀬羽町中心）では、当時の古い家屋が街道筋に歯抜け状態とはいえ 6 軒程、現存している。これを街並み回廊と称して、自由に歩いて観られるようになっている。街歩きに便利な仕掛けとしては、数百メートルの要所要所に案内看板が立っており、看板番号順に巡れるようになっている。もちろん、他の地域では、街を自由に観ていただくように歩く順番や方向性なしの場合もある。

**8.2 大山上滝での街歩き** はじめにでも述べた通り今年 9 月実施の街歩きについては、大山歴史民俗研究会から詳細なレポートが出ているので、ここでは簡単に述べる。

大山の歴史民俗研究会が主催で、(町中核の)上滝地域街道にて街衆(市民)とともに知的交流を目的に、街道沿いに町家や街並みを街歩きが企画され、これを二十数人で楽しんだ。  
(アラタモリとの違いは街衆と専門家との知的交流にあり)

上滝駅から城西水神社まで距離にして 2km 程の街道筋には民衆の文化や歴史が宿っており、これを街衆と専門家で紐解いた。実際には石仏は 4 箇所、町家 3 箇所、福祉施設 1 箇所をポイントにして街の散策を楽しんだ。街歩きならではの訪問者サボ<sup>2</sup>の著者気づきは；

- ・街の宝：プライベートな宝物館あり。宝物を鑑賞。街の宝を如何に活用するかが課題。
- ・福祉施設が街と調和：街道の空き家を施設に転用。今では 7 棟も。郊外の大規模コンクリートモダン施設とはかなり違って、大家族のイメージがあり、老人は生活を楽しんでいた。駄菓子屋もセットに子どもと介護を受ける老人とが楽しんでいた。そんな優しさが街道に沁み出していた。
- ・和やかは食から；町衆方々も加わって会食(空き家改修の食堂)について食を介した交流が和やかであった。
- ・今回の街歩きでは、街中の方々と訪問グループの方々とにおいて、ごく普通なコミュニケーションを介して街中の面白さを見出し満喫したことが皆さんにとって何よりも受けたといえる。もちろん、大山の街の魅力がそうさせていた。

・大山について、立山奥地と富山平野を結ぶ結接点として重要な地域が大山上滝であることが実感された。

・大山では 2012 年に富山市教育委員会により、大山における石仏、古民家、街並み、蔵、納屋、土木構造物を対象として「何がどこにあるのか」の観点で所在地確認、造形物形状等が調査されました。得られたデータが活用されればと願う次第である。

**9. おわりに** 大山の街歩きをしてみて、地味ながらも街にアタックする方法ありと思い、この観点から現行の街を展望し、特に大山のように極ありふれた過疎感のある街との付き合い方を雑感として述べた。以下のことをしみじみと実感した次第である。

- ・生活環境の充実の街の観光や見学とは、街住民の生活の充実(居住環境や生計)にあり。観光を介し、街住民と訪問者との交流やコミュニケーションは実際に楽しく記憶に残るものである。
- ・街を介した街住民と訪問者の交流には街歩きが適し、効用も大。大山での体験は貴重。

### A. 参考文献

- 1)富樫豊；街や村の再生への意識について、第 30 回全国研究集会資料集、新建築家技術者集団、2016.11、pp.124-127
- 2)語源由来辞典、青柳周一氏(滋賀大経済学部)が観光講演会でも紹介。
- 3)直接参考にしなかったが大山紹介のHP；一路一会；<http://www.ichiro-ichie.com/>